

O-10-22

単回使用医療機器の再使用と期限管理について

石巻赤十字病院 NST

○^{おいで}生田 みは、尾池 泰典、高橋恵美子、石橋 悟

【目的】単回使用医療機器(以下SUDs)は1回のみ使用が決められている医療用製品で使用后廃棄することになっているが、多くの製品が「昔から再使用しているから、高額だから」という理由から再使用されているのが現状である。当院では倫理委員会が認めたSUDsのみ再使用が許可されている。今回SUDsの簡易懸濁ボトルの再使用について妥当性を検討した。

【対象】未使用の懸濁ボトル及び、患者に使用した簡易懸濁ボトル2本(A・B)【方法】(1)懸濁ボトルに滅菌生理食塩水10mlを加えた調製液を培地に塗抹し、48時間培養。(2)遠心した沈渣を同様に培養。

【結果】未使用懸濁ボトルは細菌の発育なし。その他特記なし。使用済み懸濁ボトル(A)は*Stenotrophomonas maltophilia*, *Enterococcus faecalis*, coagulase-negative *staphylococci*の発育を認め、調製液にはクリーム色の沈渣を認めた。使用済み懸濁ボトル(B)細菌の発育なし、調製液は発泡と白色の沈渣を認めた。使用済み懸濁ボトル(B)の沈渣を染色した細菌は認めなかった。

【考察】使用済み懸濁ボトル(A)はボトル内部に傷があり、洗浄不十分もしくは乾燥不十分により、傷内に細菌が定着したと考えられた。また使用済み懸濁ボトル(A・B)共に白色沈渣物を認め、ボトルの洗浄が不十分で、内部に薬剤が残存していたと考えられた。使用済み懸濁ボトル(B)は発泡を認め、洗剤の洗い流しが不十分だったと考えられた。

今回、洗浄が不十分である可能性が示唆され、7日間使用した懸濁ボトルに細菌の発育を認めたため、7日間同一のボトルを継続使用することは細菌の定着を招くリスクがあると考えられる。同一懸濁ボトルを継続使用する場合は基準の見直しや洗浄方法の検討が必要と考えられる。傷がついた懸濁ボトルは再使用せず廃棄する方が良いと考えられる。

O-10-24

栄養サポートチームの健闘

～アウトカムのための組織づくり～

足利赤十字病院 栄養サポートチーム

○^{にへい りょうこ}仁平 良子、富田 栄幸、伊澤 直樹、尾崎研一郎、樋桁千恵子、三田 典子、住倉 綾香、川島 広明、和久井章男

【目的】当院栄養サポートチーム(以下NST)は平成20年に発足し、多くの壁に阻まれながらも試行錯誤し9年目を迎えた。栄養改善には多角的で全人的な、スキルや対応力と環境が必要となる。それらが整った時に栄養改善に加えて患者安全や治療効果、経済効果、さらには患者や家族の笑顔が得られると考え、取り組みをしたので報告する。

【方法】NSTはNST委員会の下部組織で、活動の規定や基準は委員会で決定し、院内統一のルールとして稼働している。NSTメンバーの増員、栄養管理システム構築、栄養サポートチーム介入基準拡大、全病棟栄養カンファレンスの実施、栄養カンファレンススクリーニング基準構築、全フロアー車いす体重計設置、経腸栄養ポンプを使用した経腸栄養移行について実行した。

【結果】メンバーの増員は6チームの稼働を実現し安定的に介入できた。栄養管理システム構築、全病棟栄養カンファレンスの実施、栄養カンファレンススクリーニング基準構築は栄養介入患者を明確に捉えられた。その結果、栄養サポートチーム介入基準も介入型と依拠型に基準が拡大され、介入が必要な患者への確に栄養介入が行えた。さらに全フロアー車いす体重計の設置により実測率が向上した。経腸栄養移行時の経腸栄養ポンプを活用したことは合併症の予防効果があったと示唆された。

【考察】発足当初は現在の低栄養患者を「どのように改善させるか」に集中していた。取り組み以降、多職種が集いはチーム医療を循環させ、連携し、役割と責任を果たす過程の中で患者の栄養改善に寄与したと考えられる。急性期病院での正の循環を念頭に置いて、栄養分野における地域包括ケアシステムの推進に取り組んでいくことは今後の課題の一つである。

O-11-01

がん患者の「就労支援」の意義と今後の課題について

徳島赤十字病院 医療・がん相談支援センター

○^{しまむら としゆみ}島村 敏文

【研究目的】厚生労働省によると、がんの治療のため、仕事をしながら通院している患者は推計32.5万人。働くがん患者の「治療と仕事の両立」をどう支えていく必要があるか。本研究では「演台名」について、考察したので、ここに報告する。

【研究方法】当センターへ「就労」に関する相談に訪れた患者・家族を対象とし、相談記録と診療録のデータを用いて、後方視的観察研究を実施した。

【倫理的配慮】研究を実施するにあたり、所属長の了承を得て実施した。又、対象となる患者の了解を得て、特定されないよう配慮した。

【結果】相談件数(平成26年7月～平成28年3月)は52件。その内、約9割が医療関係者からの紹介。相談者の約8割は患者本人。総合的な結果から、就労支援の実態について、以下の点が示唆された。

1. 就労に関する問題(働き方や職場への伝え方等)が約半数を占めた。
2. 就労問題よりも患者・家族の今後の生活に係る相談内容もあり、様々な社会保障制度に関する情報提供や利用支援が行われた。
3. 非正規雇用職員の相談は少なかった。同職員の職場の病気休暇制度の利用が困難なため、早期に退職した可能性があると考えられる。
4. がん以外の患者からも相談があり、がん患者と同様の問題を経験しており、就労支援を通して社会保険労務士(以下、「社労士」とする。)から得られた知識は応用可能である。

【考察及び結論】1. 就労支援の意義とプロセス a問題の明確化→b解決策を検討→c解決策の実行。aとbのプロセスを支えるのが就労支援であるとする。

2. 医療者と社労士との連携のメリット
- 1) 専門的で個別性の高い問題にも対応できる。
- 2) 1回の相談でより具体的な選択肢を提示できる。
3. 今後の課題
- 1) 患者の相談ニーズに合った支援提供の必要性
- 2) 広報と利用促進、地域住民・企業への啓発の必要性
- 3) 役割分担の明確化と連携の必要性

O-10-23

NST症例の転機別栄養特徴の分析 消化器内科症例を中心に

大森赤十字病院 医療技術部栄養課¹⁾、消化器内科²⁾、外科³⁾

○^{まきやま まさこ}杉山真規子¹⁾、川久保沙紀¹⁾、大西 由夏¹⁾、諸橋 大樹²⁾、渡邊 俊之³⁾、後藤 亨²⁾

【目的】当院の栄養サポートチーム(以下NST)は、低栄養患者への安全で効果的な栄養療法の提案、栄養状態改善による早期退院支援を目的に、全入院患者より低栄養患者を抽出しNST症例として介入している。今回はNST活動をより目的に適ったものとするため、今後重点的に検討すべき特徴を得ることを目的に、昨年度NST対象症例の後向き分析を行った。

【対象と方法】平成27年4月～平成28年3月間のNST346症例を診療科別に分類し、一番多くを占めた消化器内科122症例(36%)について転機別：自宅退院(以下退院)41、転院41、死亡40症例を分析、入院日数、入院理由疾患、NST介入時の栄養関連特徴を検討した。

【結果】年齢は退院82±15、転院85±12、死亡79±9歳と死亡に低い傾向が、入院日数は退院46±35、転院65±33、死亡41±19日と転院に長い傾向がみられ、入院理由疾患では退院・死亡でがん(32%・63%)、転院では肺炎(32%)が多くを占めた。NST介入時の栄養関連特徴は、血清Alb値では退院2.5±0.6、転院2.4±0.6、死亡2.1±0.5 mg/dlと差がなかった。BMIでは退院20.4±3.1、転院18.6±3.5、死亡19.6±3.5kg/m²と転院に低い傾向がみられた。投与栄養量は退院390±291、転院500±348、死亡359±302kcal/日と転院に高い傾向がみられた。栄養ルートは経口摂取割合が退院66%、転院56%、死亡63%と転院で少なかった。

【考察】結果より今後NSTにおいて、消化器内科症例では入院日数が長期化していた転院症例の特徴に着目すべきと考えられた。具体的特徴では入院理由疾患に肺炎がある症例、栄養関連特徴では血清Alb値や栄養投与量よりも、低BMI、非経口摂取症例について検討を重ねる重要性が示唆された。

O-10-25

病棟カンファレンスを利用した多職種連携による栄養管理の結果

足利赤十字病院 栄養課

○^{あめみや りま}雨宮 里枝、宮下 恭子、仁平 良子、樋桁千恵子

【背景・目的】平成28年度診療報酬改定の際、中央社会保険医療協議会で低栄養リスク群への管理栄養士の介入により栄養摂取量や体重管理、QOLへ有益な効果がみられたことが発表された。当院の入院時栄養管理計画書の栄養判定によると、Alb3.5g/dl以下の低栄養患者・低栄養リスク患者の割合は常に4割程存在している。当院では、2014年に全病棟で栄養カンファレンスが定着し、週に1回患者の栄養管理について多職種で話し合う機会が設けられている。それ以降、様々な病棟カンファレンスにも管理栄養士が参加するようになってきており、低栄養患者を減らすため、また、低栄養状態を悪化させないための取り組みとして、病棟カンファレンスを活用して取り組んだ結果を報告する。

【方法(実施内容)】1. 栄養カンファレンスでの内容充実を図った。2. 医師も参加するカンファレンスへ積極的に参加した。また、これらの評価のため他職種へアンケートを実施した。

【結果】食事に関する対応件数は食糧変更・コメント対応等を含め、カンファレンス定着前に比べると、3年間で2倍以上へ増加した。また、医師への栄養充足の報告・提案件数に関して、ひと月に340件報告・提案を行い、うち280件の提案内容が実施された(実施率80%)。その結果、栄養管理計画書の低栄養判定患者の割合が、今回の取り組み後、16%減少した。また、波及効果として他職種の栄養管理への意識も上がり、食事摂取不良患者などの情報を迅速に得ることができるようになった。

【結論】病棟カンファレンスを有効に活用したことで、他職種との情報伝達が円滑に行われるようになり、患者の栄養状態改善につながった。

O-11-02

当院における病診連携懇話会の取り組み

京都第一赤十字病院 医療社会事業部

○^{たかしなけんいちろう}高階謙一郎

地域連携の強化は医療機関において必須であることは間違いない。各病院で様々な取り組みがなされている。当院でも平時の連携強化の他に年1度病診連携懇話会を開催している。しかし、本会が有効に機能しているかどうかは疑問が残る。今回、当院の病診連携懇話会の概要・問題点・取り組みを報告する。懇話会の参加者は医師・看護師・事務・メディカル等病院を挙げて出席を促すものの、院内からは外部からの参加者は病院・診療所のスタッフが多くを占めるが、近年地域包括ケア体制構築の必要性から介護・福祉施設からの参加者も増加してきた。それぞれの職種での興味が大きく異なることから一同が会することが困難であることが問題となった。また、看護部は別の日に開催することによりより多くの看護師の参加が可能となった。職種別に分けることによりお互いの協議がより深まることが期待される。双方にメリットがある懇話会の在り方について当院の取り組みを報告する

10月20日(木)
一般演題(口頭) 抄録